

現在、日本人の二人に一人は、一生のうちに何らかの癌になると言われている、とても身近な病気です。

癌治療の主な目的は、この癌細胞をできるだけ体から取り除くこと、そして転移や再発を防ぐことにあります。癌を治療する方法はいくつかありますが、その一つが「手術」です。昔ながらの手術（開腹手術といいます）では、お腹に大きな傷をつけて、そこから手を入れて癌を取り除いていました。しかし、最近は技術が進歩し、「腹腔鏡下手術」という方法を選ばれることが増えています。



腹腔鏡下手術の様子

腹腔鏡下手術の仕組み

1. まず、お腹に5ミリから1センチメートルほどの小さな穴を数カ所開けます。
2. 一つの穴から、先端に超小型カメラ（腹腔鏡といいます）がついた細い筒を入れます。このカメラが映し出すお腹の中の様子は、高画質の大きなモニターに映し出されます。
3. 残りの穴から、マジックハンドのような細い手術器具（鉗子）を入れます。
4. 外科医はモニターを見ながら、手元器具（鉗子）を慎重に操作して、癌のある部分を切り取ったり、周りの組織をはがしたりする作業を行います。

腹腔鏡下手術は、開腹手術と比べて、患者さんにとって多くのメリットがあります。

- ・ 傷が小さい：開腹手術のような大きな傷が残らないため、見た目がきれいです。
- ・ 痛みが少ない：傷が小さい分、術後の痛みが軽くなります。
- ・ 回復が早い：体への負担が少ないため、入院期間が短くなり、早く元の生活に戻りやすくなります。

とても便利な手術法ですが、癌の大きさや種類、進行具合によっては、手術の安全性や確実性を優先して、大きな傷を開ける開腹手術の方が適している場合もあります。

癌という病気は難しいかもしれませんが、医療の進歩によって、体への負担が少ない手術法も生まれています。病気や治療法について知ること、そして、早期発見・早期治療が自分の体や健康を守るうえでとても大切です！

臨床工学科 長谷場 康之